

太田入道殿御返事

建治元年十一月三日 五四歳

貴札之を開きて拝見す。御痛みの事一には歎き二には悦びぬ。維摩詰經に云はく「爾の時に長者維摩詰自ら念えらく、疾みて床に寝ぬ。爾の時に仏文殊師利に告げたまはく、汝維摩詰に行詣して疾を問へ」云云。大涅槃經に云はく「爾の時に如来乃至身に疾有るを現じ右脇にして臥したまふ、彼の病人の如くす」云云。法華經に云はく「少病少悩」云云。止觀の第八に云はく「若し毘耶に偃臥し疾に託して教を興す、乃至如来は滅に寄せて常を談じ、病に因って力を説く」云云。又云はく「病の起こる因縁を明かすに六有り。一には四大順ならざる故に病む、二には飲食節せざる故に病む、三には坐禪調はざる故に病む、四には鬼便りを得る、五には魔の所為、六には業の起こるが故に病む」云云。大涅槃經に「世に三人の其の病治し難き有り。一には大乘を謗ず、二には五逆罪、三には一闍提。是くの如き三病は世の中の極重なり」云云。又云はく「今世に悪業成就し、乃至必ず地獄なるべし。乃至三宝を供養するが故に、地獄に墮せずして現世に報を受く。所謂頭と目と背との痛」等云云。止觀に云はく「若し重罪有つて乃至人中に軽く償ふと。此は是業が謝せんと欲する故に病むなり」と。竜樹菩薩の大論に云はく「問ふて云はく、若し爾れば華嚴經乃至般若波羅蜜は秘密の法に非ず。而るに法華は秘密なり等。乃至譬へば大藥師の能く毒を変じて藥と為すが如し」云云。天台此の論を承けて云はく「譬へば良医の能く毒を変じて藥と為すが如く、乃至今經の得記は即ち是毒を変じて藥と為すなり」と。故に論に云はく「余經は秘密に非ず。法華を秘密と為すなり」云云。止觀に云はく「法華能く治す、復稱して妙と為す」云云。妙樂云はく「治し難きを能く治す、所以に妙と稱す」云云。大經に云はく「爾の時に王舍大城の阿闍世王、其の性弊惡にして、乃至父を害し己はつて心に悔熱を生ず。乃至心悔熱するが故に遍く体に瘡を生ず。其の瘡臭穢にして附近すべからず。爾の時に其の母韋提希と字く。種々の藥を以て而も為に之を傳く。其の瘡遂に増して降損有ること無し。王即ち母に白す。是くの如き瘡は心より生ず。四大より起こるに非ず。若し衆生能く治する者有りと言はゞ是の如く有ること無けん」云云。「爾の時に世尊大悲導師、阿闍世王の為に月愛三昧に入りたまふ。三昧に入り已はつて大光明を放つ。其の光清涼にして往いて王の身を照らすに身の瘡即ち癒えぬ」云云。平等大慧妙法蓮華經の第七に云はく「此の經は則ち為れ閻浮提の人の病の良藥なり。若し人病有らんに、是の經を聞くことを得ば病即ち消滅して不老

不死ならん」云云。

已上、上の諸文を引きて惟に御病を勤ふるに六病を出でず。其の中の五病は且く之を置く。第六の業病最も治し難し。将又業病に軽有り重有り、多少定まらず。就中法華誹謗の業病最第一なり。神農・黄帝・華佗・扁鵲も手を拱き、持水・流水・耆婆・維摩も口を閉づ。但釈尊一仏の妙經の良薬に限って之を治す。法華經に云はく、上の如し。大涅槃經に法華經を指して云はく「若し是の正法を毀謗するも能く自ら改悔し正法に還歸すること有れば、乃至此の正法を除いて更に救護すること無し。是の故に应当に正法に還歸すべし」云云。荆溪大師云はく「大經に自ら法華を指して極と為す」云云。又云はく「人の地に倒れて還りて地に従りて起つが如し。故に正の謗を以て邪の墮を接す」云云。世親菩薩は本小乗の論師なり。五竺の大乗を止めんが為に五百部の小乗論を造る。後に無著菩薩に値ひ奉りて忽ち邪見を翻し、一時に此の罪を滅せんが為に著に向かつて舌を切らんと欲す。著止めて云はく「汝其の舌を以て大乗を讚歎せよ」と。親忽ちに五百部の大乗論を造って小乗を破失す。又一の願を制立せり。我一生の間小乗を舌の上に置かじと。然して後罪滅して弥勒の天に生ず。馬鳴菩薩は東印度の人にして付法藏の第十三に列なれり。本外道の長たりし時に、勒比丘と内外の邪正を論ずるに、其の心言下に解けて重科を遮せんが為に自ら頭を刎ねんと擬す。所謂「我、我に敵して墮獄せしむ」と。勒比丘諫め止めて云はく「汝頭を切ることを勿れ。其の頭と口とを以て大乗を讚歎せよ」と。馬鳴急ぎ起信論を造って外小を破失せり。月氏の大乗の初めなり。嘉祥寺の吉蔵大師は漢土第一の名匠、三論宗の元祖なり。呉会に独歩し慢幢最も高し。天台大師に対して已今当の文を諍ひ、立ち処に邪執を翻破し、謗人・謗法の重罪を滅せんが為に百余人の高徳を相語らひ、智者大師を屈請して身を肉橋と為し頭に両足を承く。七年の間薪を採り水を汲み講を廢し衆を散じ、慢幢を倒さんが為に法華經を誦せず。大師の滅後隋帝に往詣し双足を校撰し涙を流して別れを告げ、古鏡を觀見して自影を慎辱す。業病を滅せんと欲して上の如く懺悔す。夫以みれば一乗の妙經は三聖の金言、已今当の明珠諸經の頂に居す。經に云はく「諸經の中に於て最も其の上に在り」と。又云はく「法華最第一なり」と。伝教大師の云はく「仏立宗」云云。

予、随分到大・金・地等の諸の真言の經へたるに、敢へて此の文の會通の明文無し。但畏・智・空・法・覺・証等の曲會に見へたり。是に知んぬ、釈尊・大日の本意は限って法華最上に在り。而るに本朝真言の元祖たる法・覺・証等の三大師入唐の時、畏・智・空等の三三蔵の誑惑を、果・全等に相承して帰朝し了んぬ。法華・真言弘通の

時、三説超過の一乗の明月を隠して真言兩界の螢火を顕はし、剩へ法華經を罵詈して曰く戲論なり、無明の辺域なり。自害の謬誤に曰く、大日經は戲論なり無明の辺域なりと。本師既に曲がれり。末葉豈直しからんや。源濁れば流れ清からず等是之を謂ふか。之に依って日本久しく闇夜と為り、扶桑終に他国の霜に枯れんと欲す。

抑 貴辺は嫡々末流の一分に非ずと雖も将又檀那所従なり。身は邪家に処して年久しく、心は邪師に染みて月重なる。設ひ大山は頽るゝとも、設ひ大海は乾くとも此の罪消え難きか。然りと雖も宿縁の催す所、又今生に慈悲の薫ずる所、存の外に貧道に値遇して改悔を發起する故に、未来の苦を償ひ現在に輕瘡出現せるか。彼の闇王の身瘡は五逆謗法の二罪の招く所なり。仏月愛三昧に入って其の身を照らしたまへば惡瘡忽ちに消え、三七日の短寿を延べて四十年の宝算を保ち、兼ねては又千人の羅漢を屈請して一代の金言を書き顕はし、正・像・末に流布せり。此の禪門の惡瘡は但謗法の一科なり。所持の妙法は月愛に超過す、豈輕瘡を愈やして長寿を招かざらんや。此の語微無くんば声を発こして叫喚せよ。一切世間の眼は大妄語の人、一乗妙經は綺語の典、名を惜しみたまはゞ世尊は驗を顕はし、誓を恐れたまはゞ諸の賢聖は来たり護りたまへと。爾云ふ、書は言を尽くさず、言は心を尽くさず。事々見参の時を期せん。恐々。

十一月三日

日 蓮 花 押

太田入道殿御返事